



神戸の観光案内（その2） ～布引の滝～

神戸大学 経済経営研究所
特命講師 小代 薫

今回はコラム（18年7月）では、神戸の観光地、北野の異人館街を欧米人にどう案内すればよいかという話題をご紹介しました。今回は神戸の新神戸駅北側の布引の滝周辺を取り上げようと思います。

明治十七年にイギリスのジョン・マレー社が出版した『旅行者のための日本旅行案内』（チェンバレン著）というのですが、そのなかで布引の滝は神戸を代表する観光地として紹介されています。いまは木々が生い茂り、眼前に高層マンションも建っており叶いませんが、当時はここから大阪湾を一望できたようです。景勝地の魅力は万国共通で、明治初年に布引の滝周辺一帯は布引遊園地となり、滝の近くに川床を備えた茶店が出来るなど外国人観光客で大変賑わったとのこと。明治後期になると滝の上流にダムが設置されたことによって滝の水量が減少したことや、六甲山上に開発が進んだレジャー施設の興隆とともに、観光地としての影を潜めていきますが、最近になりまたミシュラングリーンガイドに星付きで掲載され、外国人観光客らによって神戸の新スポットとして再発見されつつあるようです。

当時の賑わいを示す記述がありましたのでご紹介したいと思います。

「花園社が開設した布引遊園地というのは先ず馬淵の新生田川の流れ口に久形橋と称する板橋があって、其の西詰登山口付近にはメガや、梅林亭、末廣、長生楼、門樋等の料理屋茶亭があり、雌瀧手前に三階と称する茶店があった。雌瀧下を対岸に架した釣り橋の上から滝を観て橋を渡って登るとキラク亭、トキワ亭等の茶店があり、現在の徳光院山門の処に陸橋が架かっていて橋下を通過して登れば左に泉水あり《今の瓢池》右側に池の家と称する茶店あり、泉水の上手一帯は春期爛漫たる梅桜林があつて梅の舎、近茶などの茶店があった。不動堂には元茶（屋）があり、雄瀧々壺の傍らに行者堂があつて茶店山田屋があり又稲荷祠があつて其の傍に三石亭があり、前記現在山門の処にあつた陸橋を渡って砂山に登ると頂上に砂山大神宮の祠があつて、傍に去来軒があり、別に三十三番観世音巡拝場があつて雄瀧下の鼓々瀧から打始め山上を巡って苧川谷（おがわだに）に出て瀧勝寺付近で終わって居る。此の三十三番観世音の石像は今は熊内町の瀧寺へ持って行って狭い境内一杯に置いてある。

こんな状況で当時遊園地として外国人が多く登ったもので相当賑わったものらしい。茶店については元茶屋は明治の末頃まであり。去来軒は現在の雄瀧の茶屋三つ石亭が現在雌瀧の茶屋に移って居る。又門樋と言う料理屋は宝塚へ移った。」(岡村博 布引山と徳光院 櫻谷忍編集 兵庫史談[布引號] 神戸史談会 1930)

このうち雄瀧茶屋の一軒が現在も営業中で、あと2年で創業110年となります。個人的には5月の新緑の時期がオススメです。新幹線の新神戸駅から15分で、深山幽谷でビールとおでんが楽しめます。行楽に良い季節になって来ました。まだの方は是非とも。